

症例報告

異所性乳腺より発生した線維腺腫の1例

東京女子医科大学付属第二病院 外科

*同 病院病理科

オオブ	マサヒデ	ハガ	シユンスケ	シミズ	タダオ	イマムラ	ヒロシ
大部	雅英	芳賀	駿介	清水	忠夫	今村	洋
ワタナベ	オサム	コバヤシ	コウジ	キノシタ	ジュン	ナグモ	ヒロシ
渡辺	修	小林	浩司	木下	淳	南雲	浩
ウタダ	ヨシヒト	オカベ	トシヒロ	カジワラ	テツロウ	アイバ	モトヒコ
歌田	貴仁	岡部	聡寛	梶原	哲郎	相羽	元彦*

(受付 平成9年6月11日)

はじめに

異所性乳腺においても正常乳腺と同様に腫瘍の発生をみるが、そのなかでは線維腺腫はまれとされている。今回我々は左腋窩の腫瘤を主訴として発見され、摘出生検の結果、異所性乳腺に発生した線維腺腫と診断された1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

症 例

患者：45歳，女性。

主訴：左腋窩腫瘤。

既往歴・家族歴：特記すべきことはない。

現病歴：1993年10月頃，左腋窩に腫瘤が出現し徐々に増大してきたため，1994年4月当科を受診した。初診時，乳房の理学的所見，乳腺超音波検査，乳腺X線検査，いずれも異常をみとめなかったが，乳癌の occult cancer を疑い生検を勧めた。しかし患者はその後受診せず放置し，2年後の1996年4月，腫瘤が増大したため，当科を再受診した。

現症：初診時，左腋窩に触診上最大径が15mmの不整形，弾性硬，辺縁明瞭，可動性良好な孤立性の腫瘤をみとめた。再診時，左腋窩の腫瘤の大きさは触診上25mmと増大していたが性状に大

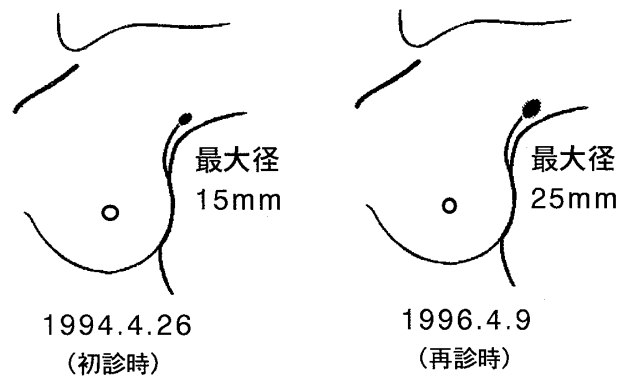


図1 診察所見

左が初診時，右が再診時の診察所見。触診上，性状の変化はなく径の増大をみとめた。

きな変化はなかった(図1)。この間，月経周期に伴う疼痛等の症状はなく，乳輪，乳頭の存在を疑わせるような皮膚の変化もみとめなかった。また初診時再診時ともに両側乳房には異常所見はなく，対側腋窩をはじめとする他の表在リンパ節は触知しなかった。

血液生化学所見：CEA, CA15-3をはじめとする腫瘍マーカーは正常値であり，他の血液生化学検査でも異常値はみとめなかった。

超音波検査所見：1994年4月初診時の乳腺超音

Masahide OBU, Shunsuke HAGA, Tadao SHIMIZU, Hiroshi IMAMURA, Osamu WATANABE, Koji KOBAYASHI, Jun KINOSHITA, Hiroshi NAGUMO, Yoshihito UTADA, Toshihiro OKABE, Tetsuro KAJIWARA and Motohiko AIBA* [Department of Surgery and *Surgical Pathology, Tokyo Women's Medical College Daini Hospital]: A case of fibroadenoma in extramammary breast tissue

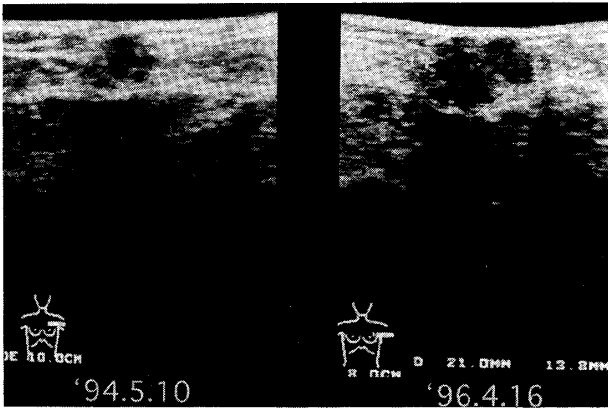


図2 乳腺超音波検査

左が初診時，右が再診時の乳腺超音波所見。初診時， 12.5×10.5 mm の腫瘍陰影をみとめた。再診時の大きさは 22.7×21.0 mm と増大していた。

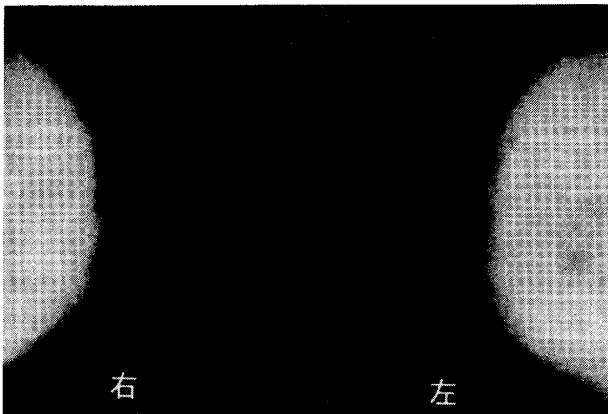


図3 乳腺 X 線検査

両側乳房は dense breast であるが，腫瘍陰影や異常石灰化はみとめなかった。

波検査では，左腋窩に 12.5×10.5 mm 大の不整形，低エコー，内部不均一な腫瘍像が描出された。1996年5月の乳腺超音波検査では，大きさは 22.7×21.0 mm と増大しているが腫瘍エコー像の性状に大きな変化はみとめられなかった（図2）。

乳腺 X 線検査所見：両側乳房は dense breast であり腫瘍陰影や異常石灰化像はみとめられなかった（図3）。また，頭部 MRI，胸部 CT，腹部超音波検査などを用いて全身検索を行ったが，他臓器には癌の原発や転移を疑わせる所見をみとめなかった。

以上の検査の結果から，炎症性の腋窩リンパ節

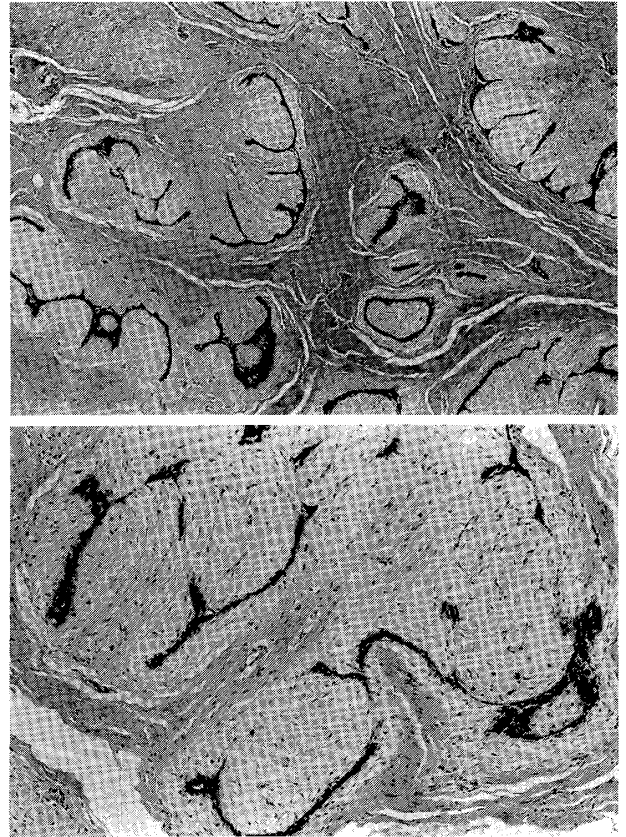


図4 病理組織所見

上：弱拡大 上皮成分と線維成分が混在し，増生している。下：強拡大 上皮成分の増生が線状に分岐する間隙としてみられる intracanalicular type の線維腺腫であった。

腫脹，あるいは乳癌のリンパ節転移，すなわち潜在性乳癌 occult breast cancer を疑い腋窩腫瘍の摘出生検術を施行した。

手術所見：局所麻酔下に手術を開始し，左腋窩の腫瘍直上に皮膚切開をおいた。腫瘍は周囲の脂肪組織とは明確に画されており乳腺組織とは連続しておらず en block に摘出することが容易であった。また術前に触診，画像検査でみとめられた以外の腫瘍はなかった。

病理組織学的所見：摘出腫瘍は $20 \times 17 \times 15$ mm の分葉状で，断面は比較的均一で，灰白色を基調とし嚢胞形成，石灰化などはみとめなかった。

摘出標本の病理所見は弱拡大では，上皮性成分と線維成分とが混合して増生する所見を呈していた（図4上）。強拡大では上皮性成分の増生が線上に分岐する間隙としてみられる intracanalicular type の線維腺腫であった（図4下）。なお，摘出腫

瘤の周囲に一部正常乳腺の小葉構造をみとめた。

以上より左腋窩の異所性乳腺より発生した線維腺腫と診断した。

考 察

異所性乳腺 heterotopic gland は一般に accessory breast と迷入乳腺 aberrant breast とに分類される。発生学的にみると、副乳腺は乳腺堤線 milk line 上に存在する乳腺原基が不完全な退化過程によっておこる遺残産物であるのに対し、迷入乳腺は発生途上に乳腺組織の一部が離脱迷入したことによっておこるとされている¹⁾。その存在部位は腋窩が最も多いが胸骨傍、鎖骨下、心窩部などにもみられる²⁾³⁾。現在では乳頭乳輪さらに固有乳腺の有無によって区別され、乳頭乳輪がなく固有乳管を有さないもののみを迷入乳腺由来の異所性乳腺として分類している(表)。しかし臨床的に両者の区別は困難で、主乳腺から離れて存在する乳腺組織を全て異所性乳腺として取り扱うのが一般的である⁵⁾。異所性乳腺は日本人では5.9~14.4%に存在し、男性より女性に多いとされている⁶⁾。

異所性乳腺においても正常乳腺と同様、腫瘍が発生することがある。本邦での1933年から1990年までの異所性乳腺腫瘍の内訳は、乳癌38例、線維腺腫3例、乳腺症8例となっており、線維腺腫の報告例は極めて少なかった。しかし、1991年から現在までで調べ得た報告数は、乳癌13例、葉状腫瘍1例、線維腺腫7例、乳腺症1例となっており、線維腺腫の報告例が増加している。近年、日本人女性において乳癌の発生が増加しているがこれは、生活環境の欧米化に伴う日本人女性の内分泌環境の変化によるものとされている。乳腺自体が内分泌環境下にあるため、ホルモン依存性である

表 異所性乳腺の分類

	乳頭または乳輪	固有乳管
副乳腺	+	+
	+	-
	-	+
迷入乳腺	-	-

文献⁴⁾より引用。

乳癌と同様に乳腺の良性疾患もまた変化がみられると考えられ、実際に非若年者での線維腺腫の割合の増加が報告されている⁷⁾。今後、異所性乳腺に関しても同様の傾向をとることが予測される。さらに線維腺腫の形質が変化し乳癌発生のリスクが高くなっているとの報告⁸⁾もあり、異所性乳腺腫瘍としての線維腺腫の重要性が大きくなっていくものと考えられる。

本邦における異所性線維腺腫の報告例は、特殊な1例⁹⁾を除けば主訴として皮膚症状、疼痛を伴うものはなく、腋窩腫瘍が唯一の主訴となっている。したがって腋窩腫瘍を主訴とする症例では腋窩リンパ節の炎症性腫脹、悪性腫瘍の腋窩へのリンパ節転移とならんで異所性乳腺に発生した線維腺腫を鑑別することが必要である。さらに腋窩は油腺あるいは汗腺の病変、脂肪腫¹⁰⁾などの線維腺腫以外の良性腫瘍が発生する部位でもあり様々な疾患の可能性を念頭におくことが重要である。最終的には穿刺吸引細胞診や摘出生検などの病理学的手段が必要なことは明白であるが、現在用いられている各種画像診断を応用していくことも必要であろう。

結 語

左腋窩の腫瘍を主訴とし、摘出生検の結果、異所性乳腺に発生した線維腺腫と診断した1例を経験した。腋窩に発生した腫瘍の診断については、乳癌のリンパ節転移、潜在性乳癌、異所性乳癌等の悪性腫瘍以外にも異所性乳腺より発生した線維腺腫をはじめとする良性腫瘍も考慮に入れて診断することが重要と考えられた。

文 献

- 1) **Gallager HS**: The Breast. Mosby, Saint Lois (1978)
- 2) **de Cholnoky T**: Supernumerary breast. Arch Surg 39: 926-941, 1939
- 3) 弥生恵司: 異所性乳癌. 乳癌の臨 3: 239-250, 1988
- 4) 松岡秀夫, 上尾裕昭, 桑野博行ほか: 腋窩の副乳腺より発生した乳癌の1例. 癌の臨 30: 387-391, 1984
- 5) 小林浩司, 芳賀駿介, 清水忠夫ほか: 異所性乳腺より発生した線維腺腫の1例. 東女医大誌 61: 256-262, 1991

- 6) 沢辺元和, 古川雅祥, 濱田稔夫: 副乳の家族例. 皮膚 29: 732-736, 1987
 - 7) 木下智樹: 乳腺疾患の臨床病理像にみる経年的変化. 慈恵医大誌 110: 577-592, 1995
 - 8) 武田晋平, 井内康輝, 有広光司ほか: 乳腺線維腺腫. 乳癌の臨 8: 587-594, 1993
 - 9) 越永従道, 石井邦雄, 荒井 徹ほか: 異所性乳腺に発生した線維腺腫の1例. 日臨外医会誌 46: 1085-1089, 1989
 - 10) Kanazawa K, Ishikawa K, Kusama S et al: Carcinoma of the axillary accessory mammary gland. Tokyo J Med Sci 78: 99-103, 1970
-